

# 伝世鏡をもつ古墳

古墳時代前期（四世紀頃）の古墳の副葬品の一つに銅鏡があります。

銅鏡は、弥生時代から朝鮮半島を経て中国からもたらされた金属器の一つで、裏面に緻密な文様が施されていることを特徴とし、北部九州を中心とした地域の首長（権力者）たちの権力の証（威信財）として広がっていききました。

古墳時代になると、この銅鏡の配布についての権力を掌握した近畿地方の倭政権とのつながりを示す威信財として、地域の首長たちは競って求めました。



赤峪古墳出土 盤龍鏡  
(町指定文化財)



土居妙見山古墳 内行花文鏡



竹田妙見山古墳 内行花文鏡

郷観音山古墳（下原）では、「三角縁神獸鏡」という古墳時代の首長が持つ鏡としては最上ランクの鏡が副葬されています。

郷観音山古墳の築造は、三角縁神獸鏡が製作された中国の三国時代（三世紀）とそれほど時期差がないので、この銅鏡が製作されてさほど間をおかずに入手し、古墳に副葬されたと思われるですが、その次に築造された赤峪古墳（土居）の「盤龍鏡」や、土居妙見山古墳（土居）・竹田妙見山古墳（竹田）の「内行花文鏡」は、中国では三国時代の後の後漢の時代、日本では弥生時代、つまり古墳の築造時期から

二五〇年余り前に製作されて伝世したもので、このような鏡を「伝世鏡」といいます。伝世鏡は製作されてからどのような経緯でこれらの古墳に副葬されたのでしょうか。

赤峪古墳の盤龍鏡は、中国の四川省あたりの工房で一世紀後半に製作されたと考えられています。鏡上りも良く、裏面の文様も鮮明で目立つ摩滅もないことから、代々の所有者から丁寧に扱われ伝世されてきたことがうかがわれます。

土居妙見山古墳の内行花文鏡は、二面出土しています。いずれも直径八・九cm弱の小型で、後漢の時代に流行した鏡ですが、この二面は後漢の内行花文鏡を模倣して国内で製作した鏡（仿製鏡）です。写真で両者を比較したら、右側の鏡は鏡上りが悪く、模様も摩滅してほとんど見えません。また、中心にあるひもを通して「紐」という穴もかなりすり減っていますので、紐にひもを通してぶら下げ、携帯して長年使用されたのでしょうか。同じ古墳に副葬された鏡ですが、入手した経路や時期などは違うのかもしれない。

竹田妙見山古墳の銅鏡も内行花文鏡の破片ですが、これは「破鏡」という、銅鏡を意図的に割ってその破片を首長層に分配したもので、弥生

時代終わり頃の北部九州によくみられる風習です。推定直径は約一九cmで、二箇所に分けられた穴は摩滅して広がっていますので、ここにひもを通して、ぶらさげて長年使用されていたことが想像できます。この破鏡も長らく伝世して竹田妙見山古墳の被葬者にもたらされたのでしよう。

ここで紹介した伝世鏡が副葬された古墳は、すべて前方後円墳です。首長の墓であったことは間違いありません。また、前方後円墳ではありませんが、円墳の竹田9号墳（竹田）からも小型の内行花文鏡が出土しています。これらの鏡がどのような形で伝世されて古墳へ副葬されるに至ったのか、そしてこれらを持つ首長たちは倭政権や他の周辺地域との関わりの中でどのような立場にあっただのか、古墳時代前期のこの地域の社会構造を知る上でも大変興味深いことです。

これらの伝世鏡は、鏡野郷土博物館（ペスタロッツ館2階）に展示しています。

参考：『鏡野町史』通史編、考古資料編、『美作の鏡と古墳』

鏡野町教育委員会 生涯学習課 日下  
電話(0868)54-7733